むかし、ある山寺に、お経を読むのが大きらいな小僧さんがいました。小僧さんは、ひまさえあれば、ねこの絵ばかり描いていました。とうとう、あるとき、和尚さんは、小僧さんをお寺から追い出してしまいました。

小僧さんは、しかたがないので、今まで描いたたくさんのお絵をふるしきにつつんで、背中に背負って出て行きました。どんだん歩いて行くと、やがて、山の中で日が暮れてしまいました。こまっぺいと、みすぼらしいお寺がありました。周りに草がいつぱい生えていて、だれも住んでいません。小僧さんは、他に寝る所もないので、おそるおそる、お寺に入って行きました。

本堂に上がると、小僧さんは、ふるしきづつみからねこの絵を取り出して、周りに一枚はりつけました。やがて、本堂は、ねこの絵でいつぱいになりました。小僧さんは、安心して、ねこの絵をながめながら眠ってしまいました。

しばらくすると、おそろしい物音がして、小僧さんは、びっくりしてとび起きました。見ると、子犬ほどもある大きなねずみと、たくさんのねこが戦っていました。にやあにやあ、がたがた、にやあにやあ、がたがたと、大ねずみとねこたちは、走り回っています。しまいに、ねこたちは、大ねずみをかみ殺してしまいました。そして、あつというまに、ねこたちは元の絵の中に入って、すました顔で、ちゃんと静かになりました。

夜が明けると、村の人たちがやって来ました。このお寺には、大ねずみがい、お坊さんを取って食うので、だれも住まなくなっていたということでした。そこで、小僧さんは、そのお寺に住んで、一生、好きなねこの絵を描いて暮らしたとき。

おしまい。